

聖書箇所：ヨハネ15：1～8

タイトル：「実を結ぶために」

テーマ：ぶどうの木が実を結ぶために、クリスチャンが実を結ぶために、教会が実を結ぶために何が大切か。実を結ぶことによってもたらされるものは何か。

はじめに；

*ぶどうの木の特性——冬の間は葉もすっかり落ちて、枯れているかのように見える。ところが、春先に少し新芽が出かかるとダイナミックに活動を開始する。タイミングを誤って枝を切り落とすと、そこから樹液が噴き出るほど。ぶどうの木に豊かな実をつけさせるために、枝の刈り込み以外にも気の遠くなるような作業がある。

*なぜ、イエス・キリストとクリスチャンの関係がぶどうの木のたとえで語られているのか。

- ・ぶどうの木のたとえは、イスラエル人にとってはよく理解できるものだった。(神と主の民の関係を表すのに、よく用いられた)
- ・ぶどうの木は、根、幹、枝、葉、花、実、種などすべてが一本のぶどうの木に属している。イエスが根であられようが幹であられようが、これにつながる枝も葉も一本のぶどうの木の一部である。これらどの部分もDNA鑑定を行うなら、全く同一のものであることが証明されるだろう。すなわち、ぶどうの木(イエス・キリスト)にしっかりつながっている限り、枝であるクリスチャンはキリストと同質のものであることになる。

本論：

* 1～3節 私たちとぶどうの木の関係

・イエス——まことのぶどうの木

父なる神——農夫(実を結ばないものを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと実を結ぶために刈り込みをなさる方)

・3節の意味

「もうきよい」の意味——「もう刈り込み済みである」

どのような方法できよくされたか?——イエスが語られた言葉によって。(イエスのことばを聞いて信じた者、拒絶した者。ヨハネ12：48) ヨハネ13：10にも「水浴した者は足以外洗う必要がありません。全身聖いのです」とある。

* 4～6節 とどまること

- ・キリストを離れては、人は実を結ぶ人生を送ることはできない。この世での成功や賞賛は、主の御目からは実とは言えない。
- ・神のいのちにつながってはじめて、人は本来の人間性を発揮できるのである。
- ・キリストにとどまらなければ、折り取られた枝のように投げ捨てられ、枯れる。そして火に投げ込まれて終わる。キリストにとどまらぬ者の人生はかくの如し。

* 7節 キリストにとどまる者の祈り

「なんでもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそ

れがかなえられます」

◎祈りが聞かれる前提

キリストのうちにとどまり、キリストのことばがとどまるなら——これはキリストとのいのちの結びつきの中にとどまるなら、そしてキリストのことばが心の中に生き続けるなら、という意味。

◎祈りが聞かれる理由

主のいのちとの結びつきがあるなら、また、主のことばが心に生き続けるならその人は主と同質のものとされ、主のみこころを理解しているので、その願うところは、主の願われることと一致するのである。それゆえ、その願いは必ずきかれる。

(参照； I ヨハネ 5：14)

* 8節 実を結んだ結果

- ・農夫であられる父なる神が栄光をお受けになる。
- ・父は子によっても栄光をお受けになる。

結論：

- ・私たちはイエス・キリストから離れては実を結ぶことはできない。
- ・イエスにつながって良い実を結ぶと、そこにはイエスのいのちが満ちている。イエスにつながっていると、イエスのご人格と同じ実を結ぶのである。いのちのある実は、その中に良き種ができて、それは新たないのちを生み出すのである。
- ・教会も同様である。かしらはキリストである。教会員一人一人はキリストのからだの部分としてしっかりつながっている。切り落とされた肢体はいのちを失う。教会はともにキリストのいのちに与り、共にキリストに似た者へと造りかえられていく。なぜなら、教会はかしらなるキリストと同質のものであるからだ(少なくとも、キリストは教会をそのようにご覧になっている)。キリストのいのちに与る教会は実を結び、新しいいのちを生み出していく。
- ・ぶどうにも多くの種類があって、木によって特徴ある実をつける。教会もキリストのいのちを生きつつ、それぞれの特徴ある実を結ぶ。巨峰の木にデラウェアは実らない。しかし、いのちはキリストより来る。
- ・大切なのは、キリストにつながり続けること。キリストのいのちを生きること。
- ・私たちがキリストに結び合わされ、キリストの弟子としてキリストと同質のものとされ、実をむすぶことによって、父なる神は栄光をお受けになる。クリスチャンと教会は、神の栄光をあらわすために存在している。